



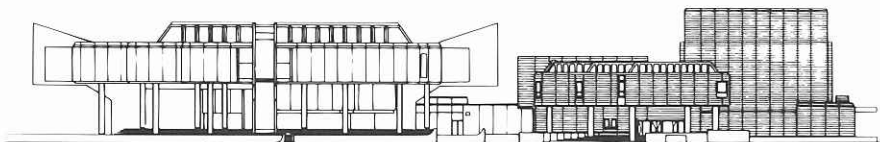
【日本の古墳】 展会場（様々な埴輪と左奥は横穴式石室の復元）

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

30 March 1998

No. 120



資料紹介

一 国指定史跡—^{ちようしつが}銚子塚出土の二重口緑壺

1. はじめに

この前方後円墳は、佐賀平野で2番目に大きい。前方部は低く、幅の狭い典型的な古式古墳で、四世紀後半の築造である (Fig. 1・4)

昭和25年10月、九大の鏡山先生や松尾禎作・松岡史氏の調査で、二重口緑壺片が6個体分ほど発見された (Fig. 3)。その位置は、くびれ部と前方部への漸移点のところである (注1、Fig. 4×印)。

今回、紹介する二重口緑壺 (Fig. 2) は、その当時採集された分の一個体で、平成8年11月11日、当館に寄贈されたものである。

2. 銚子塚前方後円墳の概要

佐賀市金立町大字金立字八本杉2355に所在する国指定史跡 (昭和30年1月1日指定) の古墳で、全長98m、後円径58m、高さ8m、前方部幅32m、高さ4.6m、周濠幅20mほどである。この銚子塚の東側は、佐賀平野最大の嘉瀬川が有明海に流れているが、この川を中心に、東西約12kmには大小の前方後円墳が点在する。その中で県内1位の規模を誇る全長114mの船塚が西方約4kmに存在している。

銚子塚の調査は、昭和25年10月、開闢のため、急拠簡単な測量調査が行われた (注2)。また、昭和50年・51年に佐賀市教育委員会が墳丘測量を中心とした調査を実施している (注3、Fig. 4)。この時、内部主体の調査を検地棒等で実施し、竪穴式石室であることが確認されている。なお、前方

部は二段、後円部は三段築成で、後円部の表面には葺石が露出している。

3. 二重口緑壺 (Fig. 2)

この壺の発見は、先述したとおりだが、出土地点については、昭和25年の測量図と、昭和51年・52年時に作成した測量図に印をつけてあり (Fig. 4)、両測量図共、前方部に面する後円部墳丘内から出土したことになる。しかし、寄贈された松岡氏 (昭和25年当時の調査員の一人) によれば、「南側くびれ部の二段築成の前方部付近から出土した」 (Fig. 4の○印) と今回言及された。相当以前のことなのではつきりしないが、これまでの調査例から、松岡氏が示されている○印地点が出土地と思われる。以下、この壺を今回改めて復元し、実測したので紹介したい。なお、この壺の残存状況は悪く、全体の1/3が欠損しているため、やや変形した復元になった。従って、正確な実測図は出来なかったことを了解願いたい。

口径30.8cm、体部最大径28.15cm、器高42.3cm、底部穿孔径4.9×3.4cmを計る。最大径は中位よりやや上にある。全体につくりはよくない。調整は、外面に粗いハケ目、内面胴部にヘラケズリがある。底部穿孔は、焼成前に施し、ナデ調整をしている。丹彩はない。頸部と口縁の境は外に断面台形の突帯をめぐらす。以上、概説したが、埋葬祭祀時に供献されたものであろう。なお、以前から館蔵されていた壺はFig. 3である。この壺はつくりがよく、シャープで、しかも丹塗りが全面に施され、磨かれている。今回紹介した壺とは異なる。祭祀等において区別されたのであろうか。

(注1)「日本考古学年報4」昭和30年。

(注2)前掲書。

(注3)「銚子塚」佐賀市教育委員会、昭和51年。

(注4)「金立開拓遺跡」佐賀県教育委員会第77集、1984年。

(学芸課長、中牟田賢治)



Fig.1 銚子塚全景

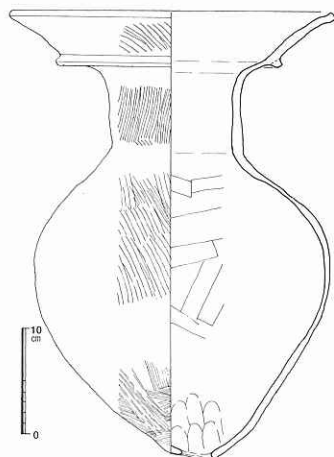


Fig.2 鉢子塚出土二重口縁壺

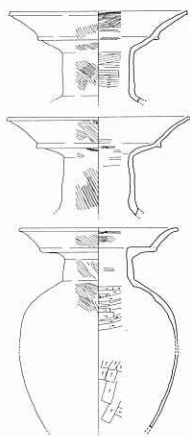


Fig.3 鉢子塚古墳出土土器 (注4文献より)

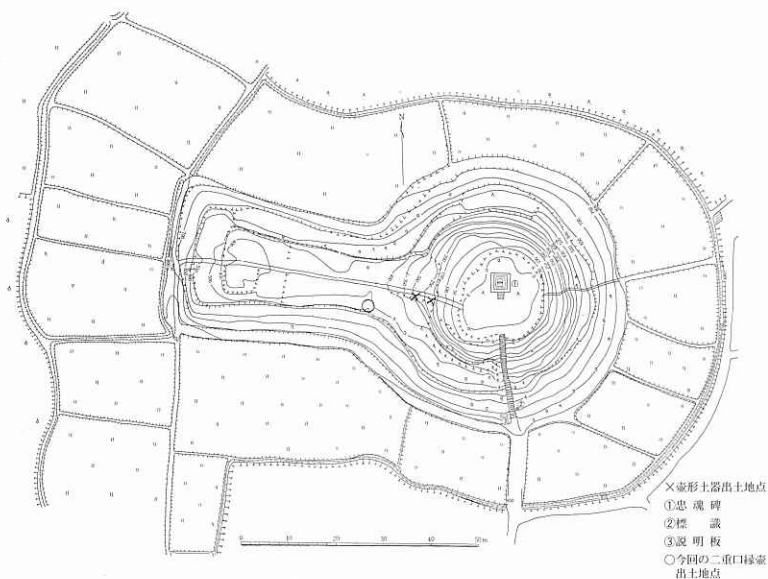


Fig.4 鉢子塚地形測量図 (注3文献より)

調査ノート 諸説にみる『クド造り』民家の成立要因 ― 今後の民家研究のために ―

分布

「クド造り」民家(屋根形態が□型・写真1)は日本列島の中で、佐賀・福岡・熊本の3県に集中して見られる民家の形態である。特に、佐賀・福岡の両県にまたがる筑紫平野に多く、分布の縁辺部を含めると有明海をとりまく様なかたちで分布していることがわかる(図1)。

諸説と問題点

「クド造り」民家が発生した時期も含め、どのような理由で発生したのかについては、これまでに種々の見解が示されてきた。これらを整理すると基本的には次の4つに分類できる。それは、①耐風構造説②佐賀藩の儉約令説③既存民家からの影響・発展説④軟弱地盤対策説である。そして③はさらに、a「鍵屋」からの発展説b「二つ家」からの発展説の2つに分類できる。

①耐風構造説

両翼(□型の突出部分)が南風(有明海からの強風)に対して支柱の役割を果たしているとする説。佐賀県建築士会が昭和54年にまとめた「佐賀の民家―クド造り―」と題する調査報告書では、元禄15年(1702年)と享保5年(1719年)の大型台風に続き、文政11年(1828年)に大被害をもたらした台風(図3)は、倒壊家屋・一万数千戸、死亡・数千人に及ぶと記されていることをあげ、この影響で劇的な「クド造り」民家の発生をみたとし、「結局、台風の惨禍が「くど造り」「じょうご谷」の家構えを創り出したとする説が最も普遍的である」と結論付けている。事実、佐賀県側には裏谷型と呼ばれる両翼を北方に突出したタイプ(□型)が多い。しかし、全てが裏谷型ではなく、しかも福岡県側ではむしろ前谷型と呼ばれる両翼を南方に突出したタイプ(▽型)が多いことを考えると、この説を「クド造り」民家の成立要因とは考えにくい。

②佐賀藩の儉約令説

青山賢信氏が調査した佐賀県の民家200棟余りのうち、約8割が2間梁であることの実を前提

に、佐賀藩が天保2年(1831年)に発布した「郷内諸法度」による建築構造用材の制限が大きな要因であるとする説。梁の狭い構造で、平面の機能の要求を満足させるため、必要に応じて2間梁を組み合わせて角(両翼)を出したものを工夫し、平面の拡大を計ったとしている。しかし、国指定重要文化財の川打家住宅(多久市西多久町大字板屋)が18世紀前半の建築と推定されているように、クド造り民家の成立年代は1700年代初頭にまでさかのぼることが可能であって、それは法度布令以前のことである。つまり、この説を「クド造り」民家の成立要因とは考えにくい。

③既存民家からの影響・発展説

a 「鍵屋」からの発展説

佐賀県内では山麓部に多く見られる「鍵屋」形式の民家からの発展説。「鍵屋」とは、片翼を突出した、屋根形態がし型の民家のことを言う。し型から□型への発展は平面拡張の手段として、その屋根形態の比較からも容易に理解できることであるが、全国的に見られる「鍵屋」形式の民家、その発展型としての「クド造り」民家が九州北部のしかもごく限られた地域にしか分布していない状況を見れば、この説を「クド造り」民家の成立要因とは考えにくい。

b 「二つ家」からの発展説

熊本県北西部に分布する「二つ家」形式の民家からの発展説。「二つ家」とは、二棟が軒を接して平行に並び、一棟が居住部、他方が土間として構成される。しかも二棟は各々2間梁が多い。この縦割系とも呼ばれる間取りは小野重朗氏が分類する¹¹⁾「くど造りA型」と類似していて、「二つ家」の、つまりそれぞれに独立した二つの棟の正面か背後を別棟でつなぐといわゆる「くど造りA型」が形成される。しかし、分布する「くど造り」民家のうち数量的にはB型が多いのが事実で、「二つ家」の発展型を「くど造り」とすることに疑問を持たざるをえないが、もし、A型の平面拡大を計った形態をB型として位置付けるならば、「二

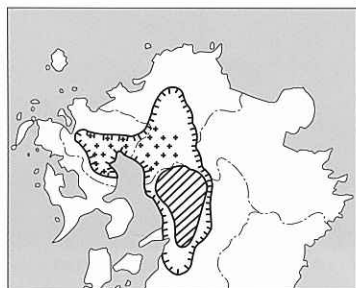


図1 (杉本尚次氏原図 一部改変)

- くど造り分布限界線
- くど造り主要分布地域
- 二つ家(熊本二棟造り)分布地域

つ家」→「くど造りA型」→「くど造りB型」という図式は描けるであろう。「二つ家」の分布状況(図1)を見ると、「くど造り」民家の主要分布地域が「二つ家」の分布地域に隣接しつつ、それを取り囲む形で見られることもまた事実である。ただ「くど造りB型」には、間取りの構成として平入系と縦割系があり、上記の図式に言う「くど造りB型」とは平入系の場合であり、縦割系は当てはまらない。つまり、「くど造り」民家全般を「二つ家」の発展型ととらえることはできないことになる(図2)。

④軟弱地盤対策説

軟弱地盤の克服こそが「くど造り」の発生のルーツであるとする説。昭和59年の日本建築学会で、橋本慎蔵氏は「民家「くど造り」と「ジョウゴ造り」の発生原因について」と題する論文を発表した。その中で、「くど造り」民家の分布が「有明粘土層」と呼ばれる軟弱地盤地域とよく一致することを指摘。これを工学的観点から考察し、その必然性を解いた。つまり、軟弱地盤における不規則な地盤沈下-いわゆる不同沈下の影響を最小限に抑える建設工法として、「くど造り」が極めて理にかなった工夫であることを解明したのである。そのキーポイントは、柱の配置バランスにある。柱で囲まれた空間の、平面上のタテとヨコに該当

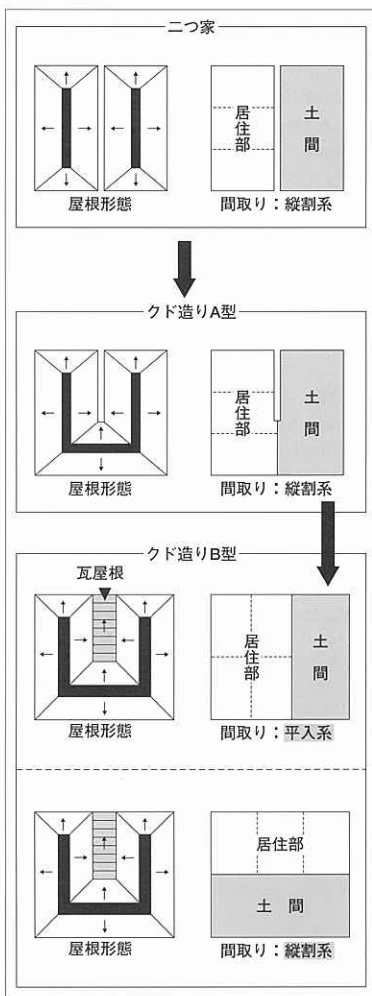


図2 「二つ家」から「くど造り」への発展 (→：水勾配)

する梁の間と桁行の寸法が二間と短い。これが正方形に近い宅地に、碁盤の目状に配置されているため、屋根の重さが各柱に均等に分散され、それぞれの柱が負担する荷重が小さくてすむ。つまり、荷重を分散し、軟弱地盤へ伝わる圧力を弱める最も効率のよい構造が「クド造り」であると言う結論だ。しかし、「クド造り」民家の分布と「有明粘土層」の分布の関係を図3でたどってみると、両者の分布に重複が認められるものの、県東北部および西南部に、「有明粘土層」とは無関係に「クド造り」民家が存在することも確認できる。この図で判断する限り、「有明粘土層」上に占める「クド造り」民家の割合は全体の約36%にすぎない。

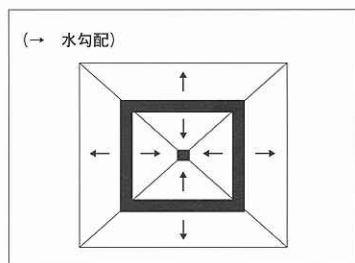
展開

このように、「クド造り」民家の成立要因については未だ決着を見ないのが実情である。ただ、「クド造り」民家が、日本列島の中でも有明海をとりまく様なかたちで極地的に分布していることの原因を最もよく論じているのは諸説④・軟弱地盤対策説であろう。成立要因に対し、普及要因という言葉を用いるならば、残る3つの諸説はそれに当たるのではないかと考えている。

(学芸員 山崎 和文)



「ジョウゴ造り」民家 (佐賀県佐賀郡川副町・国指定重要文化財)



「ジョウゴ造り」民家の屋根形態
雨水は屋根中央に集まり天井下の雨樋で受け、軒下から外へ排出される。

注①)

小野氏は「くど造り」を次の2タイプに分類した。

- A型：平行な二つの棟の屋根が中央で接して谷を作っているもの。間取りはほぼ正方形に近い形をしていて、縦に二分して半分は上間、片側に部屋が縦に並ぶ縦割型
- B型：平行な二つの棟の屋根が離れて、中央谷の部分に瓦屋根が片流れに葺いてあるもの。二つの棟の間に瓦屋根がはさまるため、床上の居住部分が広くなり四間取りが多い。

主要参考文献

- 杉本高次「日本民家の旅」日本放送出版協会1983年
- 今和次郎「日本の民家」岩波書店1989年
- 橋本慎蔵「民家「クド造り」「ジョウゴ造り」の発生原因について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会1984年
- 橋本慎蔵「くど造り是有明海文化の種」西日本新聞掲載1986年
- 下山正一「有明海北岸低平地の成因と海岸線の変遷」『Museum Kyushu』通巻52号 博物館等建設推進九州会議1996年
- 「佐賀県民俗地図」佐賀県教育委員会1980年
- 「調査報告書 佐賀の民家-くど造り-」佐賀県建築士会1979年
- 清水耕一郎「水の上に暮らす知恵」西日本新聞掲載1996年
- 島真一「佐賀のかたち-くど造り-」佐賀新聞掲載1982年



写真1 白石平野に建つ「クド造り」民家(佐賀県杵島郡白石町)

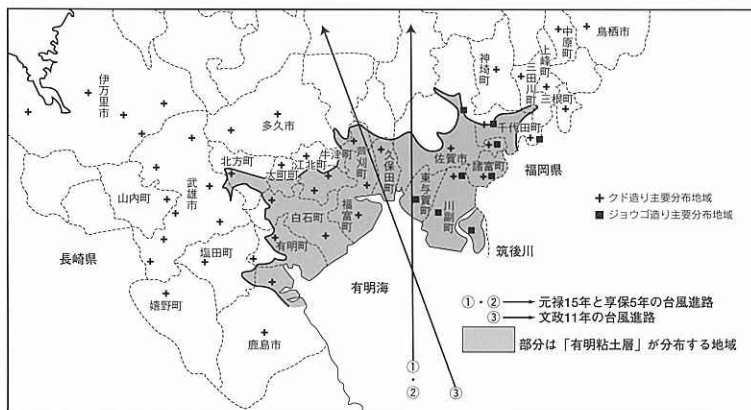


図3 本図は、「佐賀県民俗地図」佐賀県教育委員会1980年、下山正一ほか「有明海北岸低地における非海性粘土および海性粘土の分布」[Museum Kyushu 通巻52号]博物館等建設推進九州会議1996年、島真一「佐賀県での「くど造り」民家分布」[調査報告書 佐賀の民家—くど造り—]佐賀県建築士会1979年をもとに筆者が作成した。*「ジョウゴ造り」民家(屋根形態が□型)は「クド造り」民家の分布地域内にありながら、さらに局地的な分布を示す。

行事案内

1月⇨3月

日 月 火 水 木 金 土
 1 2 3
 4 5 6 7 8 9 10
 11 12 13 14 15 16 17
 18 19 20 21 22 23 24
 25 26 27 28 29 30 31

日 月 火 水 木 金 土
 1 2 3 4 5 6 7
 8 9 10 11 12 13 14
 15 16 17 18 19 20 21
 22 23 24 25 26 27 28

日 月 火 水 木 金 土
 1 2 3 4 5 6 7
 8 9 10 11 12 13 14
 15 16 17 18 19 20 21
 22 23 24 25 26 27 28
 29 30 31

カレンダー内、□印は休館日、○印は祝日

常 設 展				展 覧 会			
観覧料 大人210(150) 大学150(100)※高校生以下は無料、()内20名以上団体				種内に明記する以外は無料			
博 物 館		美 術 館					
1号展・2号展・3号展・大 展		テーマ展		1号A・B展示室		2・3号展示室	
				4号展示室			
12月28日(日)～1月1日(木)まで年末・年始のため全館休日							
1/2		1/2		1/2		1/2	
高麗・李朝の 仏画		楊柳観音の 仏画		彫 刻		鶴島綴通V	
1/11		1/13		2/8		2/8	
草場佩川の 書画		草場佩川の 書画		展覧会準備のため 休館		展覧会準備のため 休館	
2/22		2/24					
佐賀の儒學者		佐賀の儒學者					
常設展 佐賀県の歴史と文化 (1月2日～1月4日は、正月特別開館)				ヨーロッパ・アカデミー絵画展1月2日(金)～2月8日(日) 佐賀新聞社 大人・大学生1,000円(800円) 高校・中学生700円(500円) 小学生500円(300円) ※()内は前売り、団体料金 展覧会準備のため 休館 第21回 佐賀の子供たちの版画展 2月24日(火)～3月1日(日) 佐賀絵の会 第20回 佐賀大学教育学部美術・工芸卒業制作展 第4回 佐賀大学大学院教育学研究科 教育専攻美術教育専修3制作展 3月3日(火)～3月8日(日) 佐賀大学文化継承学部 第12回 佐賀総合美術ハチロク展 3月10日(火)～3月15日(日) 佐賀総合美術ハチロク会 第20回 二紀佐賀支部展 3月24日(火)～3月29日(日) 二紀佐賀支部			

日 誌



平成9年度 佐賀県立博物館企画展
 『日本の古墳—僕が調べた歴史の謎—』記念シンポジウム
 日 時 平成10年3月8日(日)
 会 場 佐賀県立美術館ホール
 主 催 佐賀県立博物館 参加者460名
 [基調講演]
 『前期古墳とヤマト王権の形成』 岩崎 卓也先生
 『中期古墳と対外交渉』 小田富士雄先生
 『後期古墳と政治社会の成熟』 佐田 茂先生
 [討 論]
 『古墳の語るもの—古代国家への道—』
 パネラー 基調講演講師
 コーディネーター 高倉洋彰先生

佐賀県立博物館・美術館報 第120号 平成10年3月30日
 編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
 〒840-0041 佐賀市城内1-15-23 TEL0952-24-3947 FAX0952-25-7006
 印 刷 日之出印刷株式会社